

敦盛

世阿弥作

季	地	ワキ	前
は	は	シテ	シテ
雜	摂	前に同じ	草刈童
	津	平敦盛	草刈男

「夢の世なれば驚きて。く。捨つるや現なるらん。

詞
「是は武藏の國の住人。熊谷の次郎直実出家し。蓮生と申す法師にて候。さても敦盛を手に懸け申しあ事。余りに御痛はしく候ふ程に。かやうの姿となりて候。又是より一の谷に下り。敦盛の御菩提を弔ひ申さばやと思ひ候。

道行
「九重の。雲井を出でゝ行く月の。く。南に廻る

小車の。淀山崎を打ち過ぎて。昆陽の池水生田川。波こゝもとや須磨の浦。一の谷にも着きにけり。

く。

詞
「急ぎ候ふ程に。津の国一の谷に着きて候。誠に昔

の有様今のやうに思ひ出でられて候。又あの上野に当つて笛の音の聞え候。此人を相待ち。此あたりの事ども委しく尋ねばやと思ひ候。

「草刈笛の声添へて。く。吹くこそ野風なりけれ。

シテサシ 「かの岡に草刈る男野を分けて。帰るさになる夕暮。

二人 「家路もさぞな須磨の海。すこしが程の通路に。山

に入り浦に出づる。憂き身の業こそ物うけれ。

下歌

「問はゞこそ。ひとりわぶとも答へまし。

上歌
「須磨の浦。もしほ誰とも知られなば。く。我に
も友のあるべきに。余りになればわび人の。親し
きだにも疎くして。住めばとばかり思ふにぞ。憂

きにまかせて過ごすなり。く。

ワキ詞 「如何に是なる草刈達に尋ね申すべき事の候。

シテ詞 「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ 「唯今の笛はかたぐりの中に吹き給ひて候ふか。

シテ 「さん候我等が中に吹きて候。

ワキ 「あらやさしや其身にも応ぜぬわざ。返すぐもや

さしうこそ候へ。

シテ 「其身にも応ぜぬ業と承れども。夫れ優るをも羨ま

ざれ。劣るをも賤しむなとこそ見えて候へ。其上

樵歌牧笛とて。

二人「草刈の笛樵の歌は。歌人の詠にも作りおかげで。

世に聞えたる笛竹の。不審な為させ給ひそとよ。

ワキ「實に／＼是は理なり。さて／＼樵歌牧笛とは。

シテ「草刈の笛。

ワキ「樵の歌の。

シテ「憂き世を渡る一節を。

ワキ「歌ふも。

シテ「舞ふも。

ワキ「吹くも。

シテ「遊ぶも。

地「身の業の。好ける心に寄竹の。／＼。小枝蟬折さ

まぐ／＼に。笛の名は多けれども。草刈の。吹く笛

ならば是も名は。青葉の笛と思し召せ。住吉の汀

ならば。高麗笛にやるべき。是は須磨の塩木の。

海士の焼きさしと思しめせ。く。

ワキ詞

「ふしぎやな余の草刈達は皆々帰り給ふに。御身一

人とゞまり給ふ事。何の故にて有るやらん。

シテ詞

「何の故とか夕波の。声を力に來りたり。十念授け

おはしませ。

ワキ「やすき事十念をば授け申すべし。それに付けても

御事は誰そ。

シテ

「誠は我は敦盛の。ゆかりの者にて候ふなり。

ワキ「ゆかりと聞けばなつかしやと。掌を合はせて南無
阿弥陀仏。

二入

「若我成仏十方世界。念佛衆生攝取不捨。

地

「捨てさせ給ふなよ。一声だにも足りぬべきに。毎

日毎夜の御弔ひ。あら有難や我名をば。申さずとも明暮に。向ひて回向し給へる。其名は我と言ひ捨てゝ。姿も見えず失せにけり。く。

(中入)

「是に付けても弔ひの。く。法事をなして夜もす

ワキ歌

がら。念佛申し敦盛の。菩提を猶も弔はん。く。
後ジテ
「淡路渴。かよふ千鳥の声きけば。寐覚も須磨の関

守は誰そ。如何に蓮生。敦盛こそ参りて候へ。

ワキ
「不思議やな鳴鐘を鳴らし法事をなして。まどろむ隙もなき所に。敦盛の來り給ふぞや。さては夢にて有るやらん。

シテ詞
「何しに夢にて有るべきぞ。現の因果を晴らさん為めに。是まであらはれ來りたり。

ワキ
「うたてやな一念弥陀仏即滅無量の。罪障を晴らさん称名の。法事を絶えせず弔ふ功力に。何の因果は荒磯海の。

シテ
「深き罪をも訪ひ浮べ。

ワキ
「身は成仏の得脱の縁。

シテ
「是れ又他生の功力なれば。

ワキ
「日頃は敵。

シテ
「今は又。

ワキ
「誠に法の。

シテ
「友なりけり。

地
「是かや悪人の友を振り捨てゝ。善人の敵を招げとは。御身の事か有難や。有難しく。とても懺悔の物語。夜すがらいざや申さん。く。

シテクリ
「夫れ春の花の樹頭に上るは。上求菩提の機をすゝめ。秋の月の水底に沈むは。下化衆生の形を見す。シテサシ
「然るに一門門を並べ。累葉枝を連ねし粧ひ。

地
「誠に槿花一日の栄に同じ。善を勧むる教へには。逢ふ事かたき石の火の。光りの間ぞと思はざりし。身の習はしこそはかなけれ。

シテ
「上に在つては下を悩まし。

地
「富んでは驕りを知らざるなり。

クセ
「然るに平家。世を取つて二十余年。誠に一昔の。過ぐるは夢の内なれや。寿永の秋の葉の。四方の嵐に誘はれ。散々になる一葉の。舟に浮き波に伏

して。夢にだにも帰らず。籠鳥の雲を恋ひ。帰雁
列を乱るなる。空定めなき旅衣。日も重なりて年
月の。立ち帰る春の頃。此一の谷に籠て。しばし
はこゝに須磨の浦。

シテ
「うしろの山風吹き落ちて。

地
「野もさえ帰る海ぎはに。舟の夜となく昼となき。

千鳥の声も我袖も。波にしをるゝ磯枕。海士の苦
屋に共寐して。須磨人にのみ磯馴松の。立つるや
一門の果ぞかなしき。

シテ詞

「さても二月六日の夜にもなりしかば。親にて候ふ
経盛我等を集め。今様をうたひ舞ひ遊びしに。
ワキ
「さては其夜の御遊びなりけり。城の内にさもおも
しろき笛の音の。寄手の陣まで聞えしは。

シテ
「それこそさしも敦盛が。最期まで持ちし笛竹の。

ワキ 「音も一節をうたひ遊ぶ。

シテ 「今様朗詠。

ワキ 「声々に。

地 「拍子を揃へ声をあげ。 (舞)

シテ 「さる程に御舟をはじめて。

地 「一門皆々船に浮べば。 乗りおくれじと汀に打ちよれば。 御座舟も兵船も。 遥かにのび給ふ。

シテ 「せんかた波に駒をひかへ。 あきれはてたる有様な

り。 かゝりける所に。

地 「うしろより。 熊谷の次郎直実。 のがさじと追つ懸けたり。 敦盛も馬引き返し。 波の打物ぬいて。 二打三打は打つぞと見えしが。 馬の上にて引つ組んで。 波打際に落ち重なつて。 終に討たれて失せし身の。 因果は廻りあひたり。 敵は是ぞと討たんとするに。 仇をば恩にて。 法師の念仏して弔はるれば。 終には共に生るべき。 同じ蓮の蓮生法師。 敵

にては無かりけり。

跡弔ひて給び給へ。

。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第六輯」大和田建樹著